

# 弥勒寺遺跡群

発掘ニュース No.37

弥勒寺跡 塔・金堂発掘調査  
〈現地説明会版〉

## 弥勒寺跡発掘物語



「弥勒寺」の塔跡は、一九三〇年（昭和五）に県の史跡指定を受けていました。一九五二年（昭和二七）、当時、東京国立博物館の学芸部長であった石田茂作が来関。弥勒寺所蔵の瓦を実見し、また簡易なボーリング調査によって金堂跡を推定して、法起寺（ほうきじ）式伽藍（がらん）配置をとる白鳳寺院の存在を確信するに至り、翌一九五三年（昭和二八）、初めての学術調査が実施されることになりました。この成果は、翌年の『ミュージアム』（東京国立博物館）三月号〜五月号に報告されました。



石田茂作と発掘に参加した中学生たち

一九五六年（昭和三一）には、第二次の発掘調査が実施され、「塔、金堂址の心々を結んだ地点より南方二〇〇尺」において、南門の礎石の位置を示すと思われる「根石」を発見したことにより、これが寺域の南端とされ、史跡指定範囲の根拠になっています。

## 弥勒寺跡塔・金堂発掘調査現地説明会

関市文化財保護センターでは、8月から、国指定史跡弥勒寺官衙（かんが）遺跡群の一つ、弥勒寺跡の塔と金堂の基壇（きだん）基礎を兼ねた土段の規模を確かめるための発掘調査を実施しています。

〈調査の目的〉 失われた

塔・金堂基壇の南側を復元整備する予定（来年度実施）です。これに先立ち、どのような形でこれらを補うべきかを検討するために、その規模・構造を確認することが目的です。

〈判明した事実〉

大規模な造成 寺院を造営する際に、大がかりな造成工事が行われていたこと。その範囲は伽藍全体に及ぶ

と推測されます。

規模 金堂は、東西五〇尺

×南北四二尺（約一四・

八×一一・四）。

塔は、四一尺（約一二・

二）四方。

構造 金堂は、地山（じや

ま）もともとの地形）を削

り出して、塔は造成土の上

に版築（はんちく）質の異

なる土を何層にもつき固め

る）工法で作られているこ

とが判りました。

## 弥勒寺跡 伽藍の整備をおこないます！

弥勒寺跡=今から約1300年前に建立された寺院、伽藍（がらん）=寺院の主要な建物群が集まる範囲



金堂跡

塔跡

発掘調査着手前 2016.7.21 撮影

折しも、一九五七年（昭和三二）に名古屋大学の澄田正一の指導のもと、丸山古窯跡（美濃市大矢田字丸山南に所在）が、発掘調査され、川原寺式の重弧文軒平瓦、凸面布目平瓦が出土したことによって、同窯が「弥勒寺」に瓦を供給した窯跡の一つであることが判明しました。かくして、弥勒寺跡四〇〇尺（二二・二）四方と丸山古窯跡（四基）が「弥勒寺跡附丸山古窯跡」として、一九五九年（昭和三四）に国史跡に指定されました。



丸山古窯跡と標柱（美濃市）

### お知らせ

#### 第五回 小瀬鶉飼講演会

「鶉飼の始まりと古代の鶉飼」（仮）

講師 賀来 孝代 氏（毛野考古学研究所研究員）

日時 平成二八年一月二三日（水・祝日）

午後一時三〇分〜三時

場所 わかくさ・プラザ「総合福祉会館」三階会議室





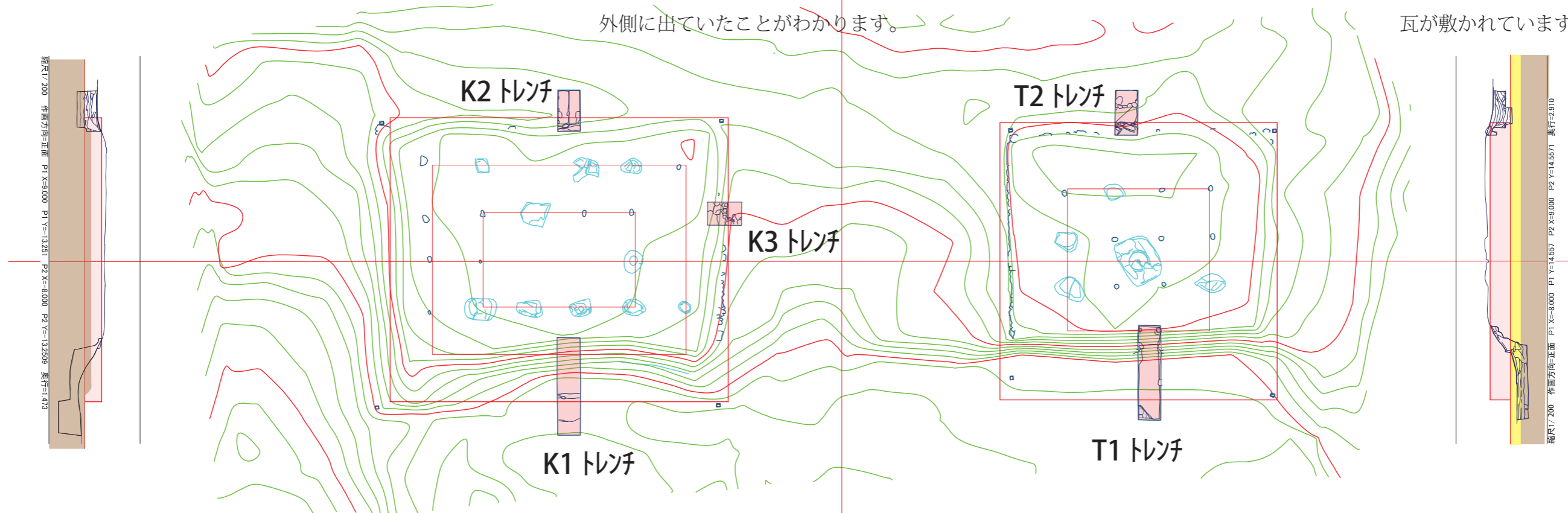
**K 2 瓦の散乱**  
 金堂の屋根から崩落した瓦が散乱した様子。  
 ←基壇寄りには落ちていません。軒先が基壇より外側に出ていたことがわかります。



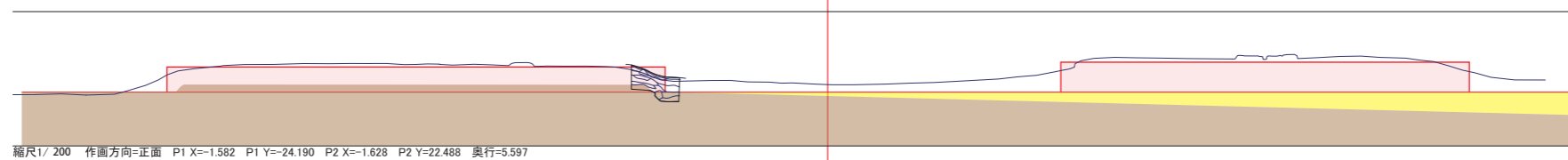
**K 3**  
 基底の石の  
 ←抜け痕の列



**T 2** 基壇外装  
 2段になっているのが特徴です。  
 ←よく見ると、整地土と版築の境目に瓦が敷かれています。



**K 1** 地山の露出  
 金堂の基壇は、地山をそのまま利用したことがわかります。  
 ←ココのしま模様は、自然の堆積です。



縮尺1/200 作画方向=正面 P1 X=-1.582 P1 Y=-24.190 P2 X=-1.628 P2 Y=22.488 奥行=5.597

金堂

基壇

整地土

地山

削り出し部

塔



**T 1** 整地土と版築の境目が  
 ←ハッキリ見えます。